まく環境がまったく異なることには，オンラインでただ検索するレバノン料理のレシピだけでは気づくことができなかった（写真 4）．

彼ら・彼女らは私と同じ条件で，日本に住み，日本で手に入る限られた食材を用いてレバノン料理を作っている．彼ら・彼女らの試行錯誤の結果できた，和洋折衷ならぬ「和中東折衷」なレバノン料理を食べて初めて，私の頭の中で勝手に作り上げていた「なんちゃってレバノン料理」というレバノン料理像は消えた．そこには，本物のレバノン料理が日本の中で生きていた．

おわりに

食を通すと異文化とのコミュニケーションがより一層築きあげやすくなる．日本と中東は地理，歴史，文化的な接点が限られており，互いのことを知るためのハードルは非常に高いように思える．しかし，万人に共通する食事というものを媒介にして，同じものを食べる，相手の地域の料理を作る，という動作を共有することでコミュニケーションの障壁を取り除くことが可能になる．今日，コロナ禍での水際対策で人々の往来が制限され国境が厚みを増すとともに，海外がますます遠い存在のように感じてしまう．しかし，食には国境のような明確な境界がみられない．料理から世界を広げると，相手とつながりが生まれやすい．そこには，互いの国境という概念を乗り越えているのかもしれない．そんなユートピアのようなことを，レバノン料理を口にしながら思いふけった．

引　用　文　献

黒木英充．2007.「歴史的シリア」大塚和夫編『世界の食文化 10　アラブ』農山漁村文化協会，48–87.

ブルーリ潰瘍との出会いとボーイスカウト運動

小　川　雄　暉 *

筆者は，西アフリカ・ガーナ共和国で顧みられない熱帯病の 1 種であるブルーリ潰瘍（*Buruli ulcer*）患者の経済的・社会的影響や治療行動について研究している．本稿では，筆者とブルーリ潰瘍との出会い及びその出会いをもたらした「ボーイスカウト運動」に焦点を当てながら，研究に至った経緯を述べていく．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ボーイスカウトとは

あなたはボーイスカウトと聞いて何を思い浮かべるだろうか．キャンプやハイキングなどの野外活動だろうか．駅やスーパーの前で行なう募金や，地域の清掃などのボランティア活動だろうか．マラソンや駅伝の時に交通整理をしたり，高校野球で選手たちの前でプラカードを持って行進したりする姿だろうか．これらすべてが，ボーイスカウト運動の一面である．

1907 年のイギリス，ロバート・ベーデン - パウエル卿（Robert Baden-Powell）が 20 人の子どもたちと行なった 7 泊のキャンプがボーイスカウト運動の始まりである．ベーデン - パウエルはこのキャンプの経験から，「少年たちの旺盛な冒険心や好奇心をキャンプ生活や自然観察，グループでのゲームなどの中で発揮させ，『遊び』をとおして，少年たちに自立心や協調性，リーダーシップを身につけ」させることが大切だと考えた．キャンプの翌年『Scouting for Boys: A handbook for instruction in good citizenship』という本を著し，ここにボーイスカウト運動は始まった［ボーイスカウト日本連盟］（写真 1）．

1908 年，日本にボーイスカウト運動が伝わると，さっそく全国各地に少年団が作られた．その後，全国的な統一組織となる動きがおき，1922 年 4 月 13 日に「少年団日本連盟」が創立し，ボーイスカウト国際事務局に正式加盟した．現在は，47 都道府県すべてで活動が展開され，10 万人以上（スカウト 5 万 8,677 人，指導者 4 万 6,409 人）が活動している［ボーイスカウト日本連盟］．

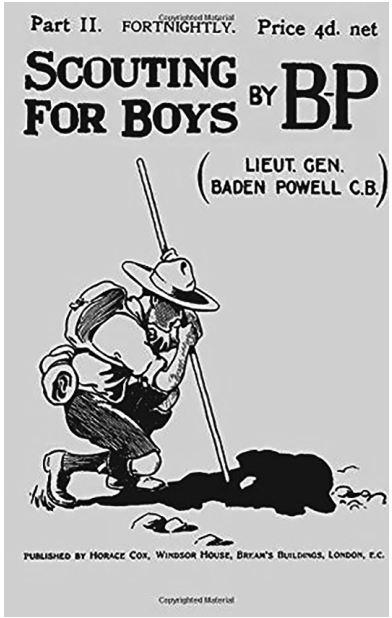

写真 1　ベーデン - パウエル著『Scouting for Boys』

そんなボーイスカウト運動を筆者は，小学 5 年生から続けている．筆者が 10 年以上にわたり継続する原動力となったのは，ジャンボリー（Jamboree）の存在が大きい．ジャンボリーとは，4 年に 1 度行なわれるボーイスカウト運動のキャンプの祭典である．初めて参加したのは，筆者の地元，静岡県の朝霧高原で 2010 年に行なわれた第 15 回日本ジャンボリー（以下 15NJ）である．日本のみならず海外 41ヵ国から 795 人，総勢 1 万 9,382 人が参加したこの祭典の最大の思い出であり天敵は雨であった．日程の前半は雨が降り続いたため，牧草地はまるで餅のような粘土となり，10 m も歩かないうちに履いていた長靴が脱げて埋まってしまうほどだった．また，朝になるとテントがビショビショになるほどの夜露にあたり，立ちかまどで炊

事をしようとしても，湿気た薪にはそう簡単に火がつかなかった．そんなひどい環境ではあったが，日程の後半は天気も回復し，富士山が初めて顔を出した時には，あちこちから歓声が上がった．

こうした，厳しい条件下で生活する経験を積んだことは，大学院でのフィールドワークで大いに役立った．使うことはなかったものの，どんな環境であっても睡眠をとろうという意図から，普段のボーイスカウト活動で使っているテントと寝袋を持参した．また，80 リットルのバックパックとスーツケースの 2 段装備で渡航したが，これは常に片手を，できれば両手を開けておいたほうが至便であるというボーイスカウトの教えを実践したものであった．

2016 年，ブルーリ潰瘍との出会い

年月は流れ，筆者は大学に進学した．サークルを探すと，ボーイスカウトサークルがあることを知り，京都の地でもボーイスカウトを続けることができたのである．2 年生になった 4 月，集会をやるという連絡があった．筆者がガーナ共和国と出会ったのも，研究対象としているブルーリ潰瘍と出会ったのもこの集会がきっかけである．集会は二部構成となっており，第一部では福西和幸氏 [1] が講演してくださった．

自己紹介と顧みられない熱帯病，ブルーリ潰瘍の概略を説明したあと，福西氏は 1 枚の写真を提示した．それは，直径 6 cm になろうかというブルーリ潰瘍にかかった患者の写真だった．さらに，「これだけの潰瘍があっても病院に行かない人，行けない人がいる．病院に行って早めに治療すれば治るのに，放置してしまい取り返しのつかないことになっている」と福西氏は続けた（写真 2）．

筆者は，この言葉をうまく理解できなかった．ブルーリ潰瘍は命に関わらない病気だというが，ここまで重症化してもなお，病院に行かないという選択が理解できなかった．アフリカに貧しい国が多いことは，ニュースや高校の地理の授業などで当たり前のように知っていた．しかし，病院に行かない，行けないという現状があることは想像できなかったのである．

その後，ガーナやトーゴ，ベナンでの福西氏の活動や研究の報告があった後，「ボーイスカウトとして，何か支援や協力できることはないだろうか」と切り出してきた．しかし，筆者らができそうなことは思いつかなかった．現地には物資，医療従事者，設備のどれもが足りていないうえ，ブルーリ潰瘍に

写真 2　ブルーリ潰瘍患者の例
左手甲に痕が残っている．

1）当時，神戸国際大学講師．現九州国際大学教授，国際センター長．

対する「正しい」知識が不十分であると感じた．しかし，こうした状況を好転させるために「真に」必要な支援は，やはり自分の目で見て，話を聞いて，肌で感じなければ分からないと思った．だからこそ，その講演が終わった時には，「ガーナに行きたい」と強く感じていた．筆者と同じ思いを抱いたスカウトは他にもいたため，福西氏と指導者たちは「ガーナに行けるように検討してみる」と約束をしてくれた．

あるブルーリ潰瘍患者との出会い

こうしてガーナプロジェクトは水面下で動き始めた．しかし，いざアフリカに行くのはそう簡単なことではなく，安全管理，予算の承認，行動計画の策定など大人たちがやるべきことは無数にあったはずである．こうした準備に目途が立った2017年3月，ガーナプロジェクトチームの第1回の会議があった．そこには，学校も学部も違う大学生4人が集まっていた．筆者らは月1回ペースで会議を重ねながら，ガーナ渡航に向けた準備を進めていき，2017年9月，1週間渡航した．現地では村やヘルスセンターなどを4日間で10ヵ所以上訪問した．その中で，あるブルーリ潰瘍患者と出会ったことが，筆者を研究の道に進ませることになったのである．

その患者は50代の女性であった．彼女は家の暗い一室でほぼすべての時間を過ごしていた．なぜなら，彼女の左ひざは骨が見えるのではないかというほどに筋肉がなかったからである．家族の話によると，30年以上前にブルーリ潰瘍を発症して以来一度も治療を受けておらず，こうした状況であるため，人目に触れないようにしているのだという．この現状を見た時，私は福西氏が講演で言った言葉を改めて思い出し，またなぜこのような患者が存在するのか，その原因を知りたいと心から思ったのだった．この出会いがなければ筆者は研究の道に進んでいなかったと断言できるほどの強い衝撃を受け，その村を後にした（写真3）．

ガーナと日本，ボーイスカウトのつながり

4日間の村やヘルスセンターへの訪問が終わり，首都アクラに戻った筆者らはボーイスカウトガーナ連盟（Ghana Scout Association）を表敬訪問した．目的は，筆者らの活動の周知と，次年度以降のコネクション作りのためである．ここで，ガーナのボーイスカウト運動の概要を述べる．ガーナ[2]にボーイスカウトをもたらしたのは，サミュエ

写真3　50代女性が住んでいた村

2）当時は英領ゴールド・コースト．

ル・ウッドという人物であった．彼はイギリスの新聞社「THE SHEFFIELD WEEKLY」が主催した絵画コンテストで優勝し，商品として数冊の本と新聞の購読権が与えられた．そのうちの 1 冊が『Scouting for Boys』だったのである．彼はこの本を読み，スカウトのグループを作りたいと考え，ロンドンのボーイスカウト英国本部に手紙を書いた．1912 年 1 月 4 日にゴールド・コースト・スカウトの設立許可が与えられ，これが現在のボーイスカウトガーナ連盟につながっている［Ghana Scout Association］．2019 年には，1 万 3,496 人がスカウトや指導者として活動している［World Organization of the Scout Movement］．

さて，ガーナ連盟の応接室に一歩入った筆者の目を引いたものは，部屋の隅の戸棚に飾られていた一枚の楯である．その楯には，15NJ 参加のお礼と書かれていたのである（写真 4）．代表の挨拶や写真撮影，記念品の交換などが終わり，自由に質問できる時間になると，真っ先にこの楯を踏まえて「ガーナ連盟から 15NJ に参加した人がいるのですか？」と質問した．すると，何人かのスカウトがはるか遠く離れた日本を訪れて，15NJ に参加したというのである．「実は私も 15NJ に参加した．さらに会場は私の地元である」というと，連盟長と筆者は立ち上がり，堅い握手とハグをした．日本からガーナに贈られた楯と再び日本人が相対する．そして，その楯の内容は，筆者が現在までボーイスカウト活動を続ける原動力となった 15NJ についてだった．この運命的な出来事は，ガーナで研究したいと思わせるには十分すぎるほどであった．

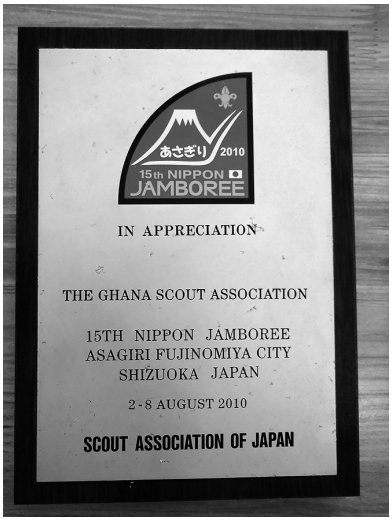

写真 4　ガーナ連盟に送られた 15NJ 参加お礼の楯

1 年後の 2018 年 9 月，筆者はガーナ派遣プロジェクトで再び訪れ，研究への思いはより確固たるものになった．大学院に進学し，3 度目の訪問となる 2019 年 9 月，前 2 回とは違いガーナには 1 人で降り立った．期間も 1 週間から 3ヵ月間になり，未知の経験が待ちかまえていた．しかし，これまでにガーナで会ったブルーリ潰瘍患者ら，お世話になった医師や看護師の方々が待っていると思うと，足取り軽く空港を出発したのであった．

引　用　文　献

Ghana Scout Association. <https://www.ghanascout.org/history/>（2021 年 5 月 20 日）

World Organization of the Scout Movement. <https://www.scout.org/sites/default/files/library_files/WOSM%20Census%202019_0.pdf>（2019 年 12 月 31 日）

ボーイスカウト日本連盟．<https://www.scout.or.jp/about/>（2021 年 5 月 20 日）